学習者による漢字力の自己評価について

―漢字クラスのレベルによるCan-do statements調査結果の違い―

加納　千恵子

要　旨

本稿では、2014年度春学期と秋学期に留学生センター（2015年度よりCEGLOC）の日本語教育部門が開設している上級漢字クラス（K800／漢字８）、中級漢字クラス（K600／漢字６）、および初級漢字クラス（漢字４）の各レベルにおいて、期末テスト時に実施した漢字学習に関するCan-do statements形式の質問紙調査の結果について報告する。各レベルの漢字クラスで学習目標としていたことと、Can-do statementsによる学習者の漢字力の自己評価との関係について考察した。

【キーワード】漢字クラスのレベル　can-do statements　漢字力　自己評価

A Study on Learners' Self-Assessment of Kanji Ability : difference of the learners' awareness concerning their working knowledge of kanji by using a can-do statements form

KANO Chieko

【Abstract】In this paper, the author reported the results of surveys of learners' awareness concerning their working knowledge of kanji by using a "can-do statements" form, which were conducted in different levels of kanji class (Kanji800/Kanji 8, Kanji 600/Kanji 6, and Kanji 4) at the end of the spring and fall semester of 2014. The author discussed the relationship between the objectives of each kanji class and the learners' self-assessment of their own kanji ability.

【Keywords】levels of kanji class, can-do statements, kanji ability, self-assessment by learners

１．はじめに

外国人日本語学習者にとって日本語の習得上の大きな障害の一つと捉えられている漢字の運用力について、従来から行われている漢字の読み書きテストだけでは十分な形成的評価ができないという指摘に基づいて、漢字力診断テスト[1]や漢字SPOT[2]などのテストが開発されてきた。一方、近年の外国語教育における自律学習の中で、漢字に関する知識や漢字の運用能力について学習者自身がどのように「できる」あるいは「できない」と意識しているかを探り、自己評価の可能性を探るという目的で、Can-do statements形式の調査紙[3]を作成し、日本国内および韓国、メキシコなどにおいて、中上級学習者を対象に調査を行った（加納 2014a, 2014b, 2015および加納・魏 2015）。

本研究では、2014年度春学期と秋学期に筑波大学留学生センター（2015年度よりグローバルコミュニケーション教育センター；CEGLOC）日本語教育部門が開設している上級漢字クラス（K800／漢字８）、中級漢字クラス（K600／漢字６）、および初級漢字クラス（漢字４）の各レベルにおいて、期末テスト時に漢字学習に関するCan-do statements形式の質問紙調査を実施した。本稿ではその結果を報告し、各レベルの漢字クラスで学習目標としていたことを考慮しつつ、レベルによってCan-do statements（以下、Cdsと略す）による学習者の漢字力の自己評価がどのように異なっているか、文化圏による評価に違いがあるか等について検討する。

２．漢字クラスの学習目標と内容

筑波大学留学生センターでは、本学の研究留学生および大学院正規生等を対象とする補講日本語コースと、協定校から来日する短期留学生（学部レベルの特別聴講学生）を対象とする総合日本語コースを開設している。補講日本語コースには、初級日本語コース（J100～J300）、中級入門日本語コース（J400）、中上級の技能別日本語クラス（J500～J800）が開講され、それらと並行して、週１コマの選択漢字クラス８レベル（K100～K800）が開講されている。また、総合日本語コースにおいても同様に、週１コマの選択漢字クラス（漢字１～漢字８）が開講されており、今回調査を行ったのは、筆者が2014年度春学期と秋学期に担当した上級漢字クラス（K800および漢字８）、中級漢字クラス（K600および漢字６）、そして初級漢字クラス（漢字４）である。

上級漢字クラス（K800および漢字８）における使用教材は、『Intermediate Kanji Book vol.2』（凡人社）の第６課以降、中級漢字クラス（K600および漢字６）における使用教材は、『Intermediate Kanji Book vol.1』（凡人社）の後半L6～L10、そして初級漢字クラス（漢字４）における使用教材は、『Basic Kanji Book vol.2』（凡人社）の後半L36～L45である。各クラスにおける学習目標と概要については、稿末の資料を参照されたい。

各クラスの受講者の構成は以下の通りであったが、※印のクラスでは調査を実施できな

かったため、調査協力者は合計76名であった。

表１　調査協力クラスの受講者数内訳

	2014年春学期	2014年秋学期	合 計
補講 K800	(※11名)	14名	14名
漢字８	(※ 6名)	11名	11名
補講 K600-1	4名	9名	13名
漢字６	4名	6名	10名
漢字４	7名	21名	76名
合　計	15名	61名	76名

補講漢字クラス「K800」および短期留学生向け「漢字８」クラスの受講者計25名を上級レベル、補講漢字クラス「K600-1」[4]および短期留学生向け「漢字６」クラスの受講者計23名を中級レベル、短期留学生向け「漢字４」クラスの受講者計28名を初級レベルとして、Cds調査の結果を分析する。

また、各レベルの受講者の文化圏別の構成は、以下の表２のように漢字圏27名、韓国５名、非漢字圏44名であった。

表２　調査協力者の文化圏別内訳

	漢字圏	韓　国	非漢字圏
補講 K800／漢字８(25)	18名	4名	3名
補講 K600／漢字６(23)	6名	1名	16名
漢字４(28)	3名	0名	25名
合　計	27名	5名	44名

上記の非漢字圏調査協力者の内訳は、ドイツ７、カザフスタン６、ブラジル５、ウクライナ４、ウズベキスタン３、ベトナム３、ロシア２、タイ２、クロアチア２、スロベニア２、リトアニア２、キルギス、トルクメニスタン、アメリカ、オーストラリア、インド、マレーシア各１であった。漢字圏の内訳は、中国26、台湾１であった。韓国はかつて漢字を使用していた漢字文化圏ではあるが、近年のハングル世代の学習者は、漢字力が弱く書けない者が多いため、漢字圏とは別に考える。また、初級レベルにおいては非漢字圏が大半で、中級レベルにおいても非漢字圏が優勢、上級レベルにおいては漢字圏が大半という内訳であった。韓国は数が少なかったため、今回の分析は、漢字圏か非漢字圏かという観点を中心に行う。

３．漢字に関するCan-do statements

漢字に関する知識および運用力を、漢字に含まれる４つの情報、すなわち形、音（読み）、義（意味）および用法に分けて考える。それぞれの情報に関してレベルに応じて達成されると思われる漢字力をCdsの形式で記述した調査紙は、漢字の構成要素である「部首」や「音符」に関する項目を加えた50のCds項目からなっている。そして、それぞれの項目に関して、「４．強くそう思う」「３．そう思う」「２．そう思わない」「１．全然そう思わない」という４段階の選択肢で調査を行った。本稿で扱う50のCds項目は、以下のように分類される。(詳しくは、加納 2014a, 2014b, 2015および加納・魏 2015を参照)

意味に関するCds	13項目
読みに関するCds	17項目
書きに関するCds	5項目
用法に関するCds	10項目
構成要素に関するCds	5項目

今回のCds調査は、2014年度の春学期および秋学期の各漢字クラスの期末テスト時に、受講者の同意を得て実施した。

４．漢字に関するCds調査の結果

４．１　レベルによる結果の検討

今回の76名の調査協力者のCds調査における評価の平均をレベル別にまとめたのが表３である。評価の平均をみると、初級から中級、中級から上級へと、漢字の意味理解、読み、書き、用法、構成要素に関して、「できる」意識が高くなっていることがわかる。

表３　調査協力者（76名）のレベル別Cds調査の結果

	初級（28名）	中級（23名）	上級（25名）
意味に関するCds	3.5	3.7	3.9
読みに関するCds	3.3	3.5	3.7
書きに関するCds	2.3	2.7	3.4
用法に関するCds	2.5	3.2	3.5
構成要素に関するCds	2.8	3.0	3.4
全体平均評価	2.9	3.3	3.6

（数値は評価の平均を表す）

このCds調査の評価の平均をグラフにしたものが図１である。縦軸が評価の数値、横軸がCdsの項目である。

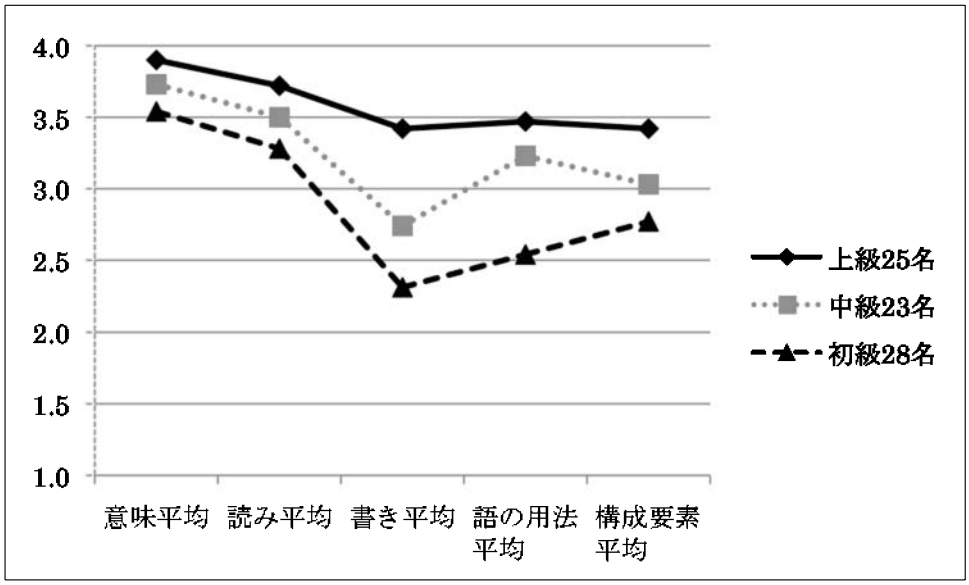

図１　調査協力者（76名）のレベル別Cds調査評価の平均

全体としては、意味理解に関する「できる」評価が高く、読みに関する評価がそれに続いており、それぞれ初級、中級、上級とレベルが上がるにつれて、「できる」評価の平均が上がっていることが見てとれる。漢字の書きに関する項目においては、非漢字圏学習者の多い初級レベルで著しく評価が低くなっており、その傾向は中級レベルでも同様であるが、漢字圏学習者の多い上級では評価がかなり上がっている。漢字語の用法に関するCds項目においては、中級レベルで目立って評価が上がっており、上級レベルにおいてはそれほど伸びていない。漢字の構成要素に関しては、意味、読みほど評価は高くないが、レベルに応じて少しずつ評価が上がっていることがわかる。

４．２　文化圏による結果の検討

今回の76名の調査協力者のCds調査における評価の平均を文化圏別にまとめたものが表４である。

評価の平均をみると、非漢字圏学習者は初級レベルが多いために、全体平均評価が最も低くなっているが、「できる」意識が高い項目（意味理解と読み）と低い項目（書き）の差が大きく、用法と構成要素に関しては評価が中間的であることがわかる。今回の調査では韓国の学習者の数が多くなかったので、この結果だけから確かなことを言うことはできな

いが、加納・魏（2015）の結果と比較するために、別に扱った。

表４　調査協力者（76名）の文化圏別Cds調査の結果

	非漢字圏（44名）	韓　国（5名）	漢字圏（27名）
意味に関するCds	3.6	3.8	3.9
読みに関するCds	3.4	3.6	3.7
書きに関するCds	2.3	2.9	3.6
用法に関するCds	2.8	3.4	3.4
構成要素に関するCds	2.9	3.2	3.4
全体平均評価	3.0	3.4	3.6

（数値は評価の平均を表す）

このCds調査の評価の平均をグラフにしたものが図２である。

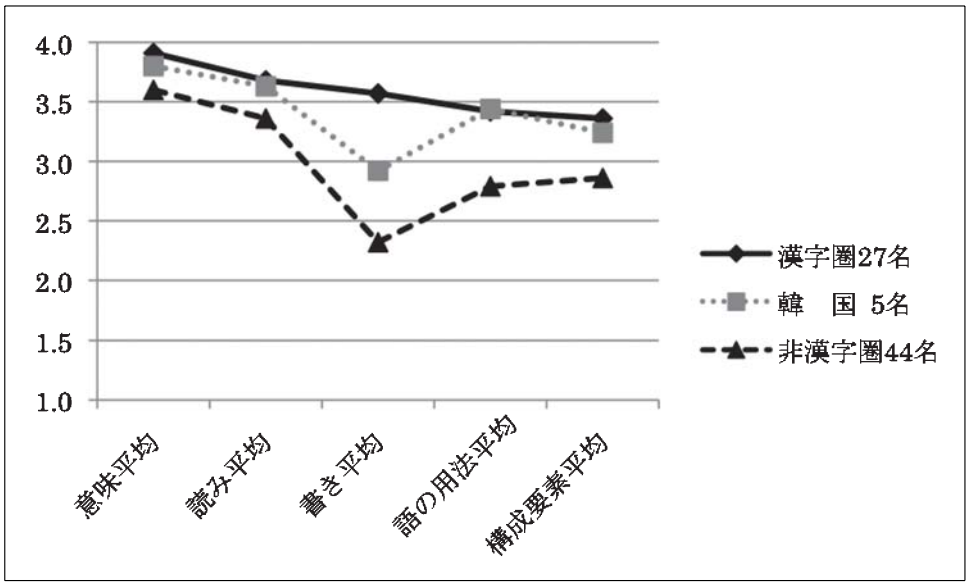

図２　調査協力者（76名）の文化圏別Cds調査評価の平均

漢字圏学習者の自己評価は、上級レベルが多いこととも関係していると思われるが、母語知識が生かせる意味理解の評価が高いのは当然であるが、得意であるはずの書きに関する評価がそれほど高くなっておらず、全体的にメリハリのない評価結果となっていることがわかる。漢字圏学習者の自己評価にメリハリがないという特徴は、2013年冬に日本国内において、中上級の漢字圏学習者83名、韓国を含む中上級の非漢字圏学習者34名を対象に行ったCds調査（加納 2014a）の結果とも一致している。2013年の調査では、漢字圏学習

者83名のCds評価の平均は、意味3.6、読み3.4、書き3.2、用法3.2、構成要素2.9であった。

また、韓国の学習者の評価結果については、2013年夏に韓国の大学で行われたCds調査（加納・魏2015）でも、書きの苦手意識に関して共通した傾向が見られた。韓国の大学生39名（中上級）のCds評価の平均は、意味3.6、読み3.4、書き2.8、用法2.9、構成要素2.8であり、今回の漢字クラスでの調査では、用法および構成要素に関するCdsの評価が若干高くなっていることが指摘できる。これは、筑波大学の漢字クラスにおいて漢字語の用法に関する練習に力を入れていること、また形声文字の部首や音符に注意を向けさせる指導が行われていることと関係がある可能性がある。

さらに、非漢字圏学習者の評価結果についても、2013年夏にメキシコにおいて行われたCds調査（加納・魏 2015）と共通した傾向が見られた。メキシコの大学および語学校の中級学習者42名のCds評価の平均は、意味3.5、読み3.3、書き2.4、用法2.5、構成要素2.9であり、今回の漢字クラスでの評価の方が全体的に若干高かった。特に、用法に関するCdsの評価が高くなっているのは、初級漢字クラスおよび中級漢字クラスにおける漢字語の用法練習の成果である可能性があろう。ただ、漢字の構成要素（形声文字の部首や音符）に関しては、漢字圏学習者に比べて「できる」評価が高くないという結果になった。これは今回の調査において、非漢字圏学習者のほとんどが初級と中級レベルであったことと無関係ではないと思われる。

今回の調査結果を前回の日本国内における調査および海外における調査の結果と合わせてまとめると、以下のようになろう。

⑴ 漢字の意味がわかる、読めるという意識は、レベルに応じて順次高くなっていくが、非漢字圏、漢字圏、韓国という文化圏を問わず、どのレベルにおいてもかなり高い。

⑵ 漢字の書きに関する意識は、文化圏によって、またレベルによって差が見られる。特に、非漢字圏学習者の場合、漢字の運用力が高い国内の学習者であっても「書けない」という意識が強く、かなり顕著に苦手意識が見られる。韓国の学習者も、漢字圏学習者に比べると、「書く」ことに対する評価が低かった。

⑶ 漢字の用法に関する意識も、レベルに応じて順次高くなっていき、特に中級レベルにおいて著しい伸びが見られる。しかし、漢字圏学習者においては、上級レベルでも、漢字の用法は他の項目より低い評価結果となっているのが特徴的である。

⑷ 漢字の構成要素に関する意識は、レベルを問わず、また文化圏を問わず、高いとは言えないが、前回の海外における調査結果と比べると、今回の漢字クラスにおける構成要素に関する平均的「できる」意識は、若干高めであることがわかった。

⑸ 今回の調査でも、漢字圏学習者は、得意だと思われる項目と苦手だと思われる項目の間にあまり評価差が見られなかった。これは、Cdsという形式の自己評価に慣れておらず、自分の知識・運用力を正しく評価できていない可能性もあるのではないか。

上記にまとめた以外に、当然のことながら、漢字圏学習者の中にも、非漢字圏の学習者の中にも、自分の能力を過大評価する傾向にある者と、過小評価する傾向にある者とがあり、グループの平均的評価を見るだけでは、結論を出すことは難しい。また、今回は調査の全体的な傾向をみるに留まり、項目毎の詳しい分析ができなかった。今後の課題としたい。

５．まとめと今後の課題

本稿では、2014年度春学期と秋学期に筑波大学留学生センター日本語教育部門が開設している上級漢字クラス、中級漢字クラス、および初級漢字クラスの各レベルにおいて実施した、漢字学習に関するCan-do statements形式の質問紙調査の結果を報告した。前回の海外における調査で課題となっていた、同一環境においてレベルの異なる漢字圏学習者、非漢字圏学習者および韓国の学習者を対象として調査が実施できたことは一つの成果であった。しかし、今回は自己評価の全体的な傾向をみるに留まり、項目毎の詳しい分析ができなかった。

今後、さらに調査協力者数を増やして量的分析を行うとともに、調査項目ごとの質的分析も進めていきたい。また、調査協力者たちが実際に何を考えて自己評価を行っていたのか、フォローアップインタビュー等を行う必要があると思われる。さらに、今まで行ってきた、初級および中級レベルにおける学習項目を中心としたCdsに加えて、中上級、上級レベル向けのCds項目の作成も試みたい。

※この研究は、平成26年度科学研究費補助金基盤研究（B）「日本語教育スタンダードにおける漢字力の評価に関する研究」（研究課題番号：23320102）および平成27年度科学研究費補助金基盤研究（B）「日本語の漢字力評価の方法に関する研究」（研究課題番号：15H03214）からの助成を受けている。

注

１．漢字力診断テストとは、漢字の読み書きの力だけでなく、字形認識、意味理解、漢字語の語構成、文脈による用法、品詞性、送りがな、音読みの力、音声による漢字処理の力などを12の項目でチェックし、その診断結果をフィードバックするものである。その原型である中級レベルの漢字力診断テストは、加納ほか（1993）に掲載されているが、その後、初級レベルの漢字力診断テスト（加納・酒井 2003）も作成され、WEB版テストとして改訂され（加納 2008）、現在はTTBJ（筑波日本語テスト集）の中で公開されている。詳しくは、加納・魏（2014）および村上ほか（2013）の第５章「TTBJ（Tsukuba Test-Battery of Japanese）」を参照のこと。

2．漢字SPOTテストは、自然な速度の音声を聞きながら、与えられた文中の漢字語彙の部分に空欄を設け、漢字を１字選択して入れさせるという形式のテストである。小林らにより開発されたSPOTのテスト形式を利用して、漢字語彙の運用力を測るテストとして開発された（加納2009）。現在はTTBJ（筑波日本語テスト集）の中で「漢字SPOT 50」が公開されている。

3．Can-do statements調査紙の質問項目は加納（2014a）の【資料４】に載せてある。今回の調査では、回答形式を４段階評価に改めた。

4．K600レベルの漢字クラスには、K600-1（月曜）とK600-2（水曜）の２クラスがあり、筆者の担当はK600-1であった。

参考文献

加納千恵子・清水百合・竹中弘子・石井恵理子・阿久津智（1993）『Intermediate Kanji Book』vol.1、凡人社

加納千恵子・酒井たか子（2003）「漢字処理能力測定テストの開発」筑波大学留学生センター『日本語教育論集』18号、pp.59-80.

加納千恵子（2008）「レベル別漢字語彙処理能力テストの問題形式　―WEB漢字テストのマルチレベル化に向けて―」筑波大学留学生センター『日本語教育論集』23号、pp.1-13.

加納千恵子（2009）「漢字語彙の音声処理能力を探る　―漢字SPOTの開発と課題―」筑波大学留学生センター『日本語教育論集』24号、pp.1-17.

加納千恵子（2014a）「漢字に関するCan-do Statements調査から見えてくるもの　―漢字の知識と運用力についての学習者意識―」筑波大学留学生センター『日本語教育論集』29号、pp.71-92.

加納千恵子（2014b）「Can-do Statementsによる漢字力の評価について」ヨーロッパ日本語教師会『ヨーロッパ日本語教育』18、pp.115-120.

加納千恵子（2015）「能力記述文による漢字力の自己評価の可能性」『JSL漢字学習研究会誌』７号、pp.86-93.

加納千恵子・魏娜（2014）「外国人日本語学習者の漢字力の評価について　―TTBJ（筑波日本語テスト集）を利用して―」『JSL漢字学習研究会誌』6号、pp.54-62.

加納千恵子・魏娜（2015）「学習者による漢字力評価について　―Can-do Statementsによる漢字力意識調査から―」筑波大学留学生センター『日本語教育論集』30号、pp.35-53.

村上京子・加納千恵子・衣川隆生・小林典子・酒井たか子／関正昭・平高史也編（2013）『日本語教育叢書＜つくる＞　テストを作る』スリーエーネットワーク

【資料】平成26（2014）年度漢字クラス概要表

<table>
<tr><th rowspan="2"></th><th colspan="2">初級 漢字クラス</th></tr>
<tr><th>K100／漢字 1</th><th>K200／漢字 2</th></tr>
<tr><td rowspan="4">概要</td><td>[教材]
Basic Kanji Book vol.1　L1～L11
[学習目標]
・漢字の表意性を理解し、字形の識別、構造の識別することができる。
・日常生活においてよく目にする漢字を調べたり、覚え方を工夫したりすることができる。
[学習項目]
・曜日（日月火水木金土　L1, 2）
・数字（一二三四五六七八九十百千万　L3）
・位置（上中下前後　L4, L10）
・漢字の組み合わせ（明休体好男林森間畑岩　L5）
・体の部分（口目耳手足　L6）
・生物（人女男子牛馬鳥魚貝　L1-7）
・基本形容詞の漢字（大小新古長短高安低明暗多少　L8）
・基本動詞の漢字（行来帰食飲見聞読書話買教作泳待　L9）
・時の表現（朝昼晩夜夕方午前後毎週曜日月年時分　L10）
・漢字の部首（偏、旁、冠、脚、垂、構、遶）と字形構造（L11）

[学習・教育方法]
L1, 2は漢字の表意性を解説しながら丁寧に書き方を指導する。L3～L7は漢字の成り立ちなどを教えるためのオリエンテーションとして指導する。L8以降は、語彙として文中で使わせながら指導する。 L11では漢字の字形構造を教え、カードを使って組み合わせを考えさせたり、辞書を引く練習をしたりする。詳しくはK200で学ぶ。</td><td>[教材]
Basic Kanji Book vol.1　L11～L22
[学習目標]
・漢字の字形の構造性を理解し、部首、音符などが識別できる。
・漢字の訓読みと音読みがわかる。
・日常生活および学生生活においてよく目にする漢字を調べたり、覚え方を工夫したりすることができる。
[学習項目]
・へんとつくり（人べん、さんずい、言べんなど　L11）
・かんむりとあし（ウかんむり、草かんむり、雨かんむり、人やねなど　L12）
・たれとかまえ（まだれ、病だれ、しかばね、国づくり、門構えなど　L13）
・しんにょう、形声文字の音符「青」「寺」「可」（L14）
・家族の漢字（L15）
・形容詞の漢字（L16）
・自他動詞の漢字（L17）
・位置関係の漢字（L18）
・場所の接辞（L19）
・住所の漢字（L20）
・する動詞の漢字（L21）
・科目の漢字（L22）
[学習・教育方法]
L11-14は漢字の構造性を解説しながら、学習者が知っている漢字の部首の見分け方を指導する。L15～22は、漢字語彙として文中で使わせながら指導する。訓読みと音読みの読み分け練習やテキストだけでなく、学習者の身の回りの漢字を辞書などで調べる練習をしたり、学習方法を工夫させたりする。</td></tr>
<tr><th>K300／漢字 3</th><th>K400／漢字 4</th></tr>
<tr><td>[教材]
Basic Kanji Book vol.2　L23～L35
[学習目標]
・初級の漢字語彙を覚え、音読み、訓読みの読み分けができる。
・漢字を使ったやさしい読み物が読め、簡単な文を書くことができる。
[学習項目]
・趣味の漢字（L23）
・反対の動作の漢字（L24）
・結婚の漢字（L25）
・四季の漢字（L26）
・仕事の接辞（L27）
・テスト問題の漢字（L28）
・試験の漢字（L29）
・手へんとさんずいの漢字（L30）
・旅行の漢字（L31）
・交通機関の漢字（L32）
・表示の漢字（L33）
・物の総称の漢字（L34）
・経済の漢字（L35）

[学習・教育方法]
漢字の音訓の読み分け（単字の場合は訓読みの和語、熟語の場合は音読みの漢語が多いこと）を指導する。漢字語彙として文中で使わせながら指導する。テキストだけでなく、学習した漢字を使って作文させたり、辞書を引きながら読み物を読んだりする練習をする。</td><td>[教材]
Basic Kanji Book vol.2　L36～L45
[学習目標]
・初級校半の漢字語彙を覚え、音読み、訓読みの読み分けができる。
・漢字を使ったやさしい読み物を辞書を使いながら読め、簡単な作文を書くことができる。
[学習項目]
・感情表現の漢字（L36）
・自他動詞の漢字（L37）
・形容詞の漢字（L38）
・空港の漢字（L39）
・地理の接辞（L40）
・漢字熟語づくり（L41）
・大学生活の漢字（L42）
・変化動詞の漢字（L43）
・抽象的表現の漢字（L44）
・抽象的な接辞（L45）

[学習・教育方法]
漢字の音訓の読み分けを指導しながら漢字語彙として文中で使う練習をする。後半は抽象的な語彙が増えるため、習った漢字を使った読み物を用意して、読み練習をしたり、作文練習をしたりする。中級クラスになると、漢字語彙中心の学習となり、漢字の書き方なども自分で練習することになるため、その準備をしておくための活動を行う。</td></tr>
</table>

学習者による漢字力の自己評価について

	中級 漢字クラス	
	K500／漢字 5	K600／漢字 6
概要	概要［教材］ Intermediate Kanji Book vol.1　L1～L5 ［学習目標］ ・中級の漢字語彙の読み書きを覚えながら、正確に運用できるようにする。 ・学習者自身が自分の弱点に気づき、それを克服するための方法を工夫できるようにする。 ［学習項目］ ・漢字力診断テストで自分の弱点に気づく ・漢字の形、音、意味、用法によるグルーピング（L1） ・反対語・対義語の漢字（L2） ・漢語動詞の用法（L3） ・漢語形容詞の用法（L4） ・同音の漢字（L5） ・形声文字の音符（復習 1） ［学習・教育方法］ テキストの漢字を学習するだけでなく、既習の漢字語彙の読み書き、意味用法などの運用力をつけるために、各学習者の弱点を整理する。インターネットで学習漢字語彙を検索して読み物を探させ、読み練習などにつなげる。学習した漢字語彙を適切に使って文を作る練習を行う。	［教材］ Intermediate Kanji Book vol.1　L6～L10 ［学習目標］ ・中上級の漢字語彙の読み書きを覚えながら、正確に運用できるようにする。 ・学習者自身が読みたいものから漢字および漢字語彙を抽出し、使えるようにするための方法を工夫できるようにする。 ［学習項目］ ・漢語の語構成（L6） ・漢語動詞の用法（L7） ・漢字の音訓（L8） ・同訓語の漢字（L9） ・類義語の漢字（L10） ・形声文字の音符（復習 2） ［学習・教育方法］ テキストの漢字を学習するだけでなく、既習の漢字語彙の読み書き、意味用法などを整理して運用力をつける。インターネットで学習漢字語彙を検索して読み物を探させ、読み練習などにつなげる。学習した漢字語彙を適切に使って文を作る練習を行う。

	上級 漢字クラス		
	K700／漢字７	K800／漢字８（春学期）	K800／漢字８（秋学期）
概要	[教材] Intermediate Kanji Book vol.2 L1～L5 [学習目標] ・上級の漢字語彙の読み書きを覚えながら、教育・心理学などの文系と、科学技術などの理系の分野によって語彙を適切に使い分けられるようにする。 ・学習者自身が読みたいものから漢字および漢字語彙を抽出し、使えるようにするための方法を工夫できる。 [学習項目] ・性格・心理の漢字語彙（L1） ・教育関係の漢字語彙（L2） ・新幹線と環境問題の漢字語彙（L3） ・コンピュータ関係の漢字語彙（L4） ・航空機と携帯機器の漢字語彙（L5） [学習・教育方法] テキストの漢字を学習するだけでなく、初級・中級で既習の漢字を使った未習語彙の存在にも気づかせ、それらの読み書き、意味用法なども整理することにより、上級の漢字語彙運用力をつける。インターネットで学習漢字語彙を検索して読み物を探させ、読み練習などにつなげたり、学習した漢字語彙を適切に使って文を作る練習などを行う。	[教材] Intermediate Kanji Book vol.2 L6～L10 [学習目標] ・上級の漢字語彙の読み書きを覚えながら、地球科学、経済・金融、歴史などの専門分野によって語彙を適切に使い分けられるようにする。 ・学習者自身が読みたいものから漢字および漢字語彙を抽出し、使えるようにするための方法を工夫できる。 [学習項目] ・地震の漢字語彙（L6） ・火山・温泉の漢字語彙（L7） ・経済関係の漢字語彙（L8） ・金融関係の漢字語彙（L9） ・歴史関係の漢字語彙（L10） [学習・教育方法] テキストの漢字を学習するだけでなく、初級・中級で既習の漢字をも含めて総合的な漢字の読み書き、意味用法などの練習を行って、上級の漢字語彙運用力をつける。インターネットで学習漢字語彙を検索して読み物を探させ、読み練習などにつなげたり、学習した漢字語彙を適切に使って文を作る練習などを行う。余力があれば、学習者に自分の専門分野の漢字語彙を集めさせ、練習問題を作るなどの活動を行う。	[教材] Intermediate Kanji Book vol.2 L11～L16 [学習目標] ・上級の漢字語彙の読み書きを覚えながら、健康医学、栄養学・化学、物理・数学、環境、政治などの専門分野によって語彙を適切に使い分けられるようにする。 ・学習者自身が読みたいものから漢字および漢字語彙を抽出し、使えるようにするための方法を工夫できる。 [学習項目] ・健康・医学関係の漢字語彙（L11） ・栄養学・化学関係の漢字語彙（L12） ・物理・数学関係の漢字語彙（L13） ・環境問題の漢字語彙（L14） ・政治関係の漢字語彙（L15） ・国際関係の漢字語彙（L16） [学習・教育方法] テキストの漢字を学習するだけでなく、初級・中級で既習の漢字をも含めて総合的な漢字の読み書き、意味用法などの練習を行って、上級の漢字語彙運用力をつける。インターネットで学習漢字語彙を検索して読み物を探させ、読み練習などにつなげたり、学習した漢字語彙を適切に使って文を作る練習などを行う。余力があれば、学習者に自分の専門分野の漢字語彙を集めさせ、練習問題を作らせるなどの活動を行う。